



ある町にまっしろな猫がいました。
きれいな声で鳴く猫は、猫のみんなの悩みを聞いているやさしい猫でした。
そして、まっくろな犬が苦手でした。
つよくて恐ろしい犬、猫は目を見るだけでおびえていました。

おなじ町にまっくろな犬がいました。
黒い影のような目でにらむ犬は、弱い犬を守ってあげる強い犬でした。
いつもニコニコしている猫、犬は目を見るとイライラしました。

ある日のことです。

ひとつの目とひとつの足をけがした子が歩いてきました。
犬なのか、猫なのかもわからない姿で、
うまく声も出せず、いつも叫んでいました。

その子とはまわりの誰も話そうとしませんでした・・・

まっしろな猫が勇気を出して語りかけました。

「きみ、なにか悩みごとでもあるのかい？一緒に考えよう」

あの子はあいかわらず、うめいています。

まっくろな犬が気になって話しかけました。

「痛くするやつがいたのか？俺が守ってやるぞ」

あの子はまだ、うめいて叫んでいます。

「ねえ、この子は猫だよ。どうしてやさしくするの？」

猫は怒って、ふーっといきをふきかけます。

「おい、どうみても犬だぞ。なぜ、語りかける」

犬は怒ってふうっとため息をつきます。

二匹の間に立っていたお花が、ゆっくりと風になびいてゆれました。

すると、あの子はふふっと笑いました。

まっしろな猫はもういちど、お花にふーっとしました。

あの子は笑いませんでした。

まっくろな犬も、もういちどふうっとため息をふきかけました。

なんどやっても笑いません。

二匹はがっかりして、一緒にためいきをふくと、お花はもういちどダンスのようにゆれました。

あの子は大笑いました。

二匹が目と目を合わせて驚いていると、あの子はお腹をかかえて笑いました。

おもしろくなって、もう一度お花をダンスさせました。

あの子はいつまでも、楽しそうに笑っていました。

二匹は面白くなって、毎日そうして笑わせてあげました。

ある朝の日、猫たちが言いました。

あんな猫より僕らの悩みを聞いてください。
そもそも、あの犬と仲良くなるなんて・・・と。

まっしろな猫はとてもしょんぼりしました。

犬たちが騒ぎ始めました。

あんな犬より僕らのそばで守ってください。
そもそも、猫と一緒にいるなんて・・・と。

まっくろな犬はとてもしょんぼりしました。

冷たいことばを猫たちはあの子に言いました。
まっしろな猫はいつも、やさしく語りかけ、あの子をはげましていました。

つよいちからで犬たちは、あの子を町から追い出そうとしました。
まっくろな犬はいつも、犬たちからこの子を逃がしてあげました。

ある満月の夜、二匹はあの子のために、はじめて目と目をかよわせました。

猫はおびえます。獣の目を。

犬はイライラしました。あたたかい目を。

それでもゆっくりと、ふたつのところをかよわせて。

「世界中の猫に嫌われても、この子を守りたい」

力強く、まっしろな猫は言いました。

「世界中の犬が敵になっても、この子を守りたい」

やさしい言葉で、まっくろな犬が言いました。

三匹で、この町よりずっと遠くの町へ行こうときめました。

あの子が安心してくらせるところへ。

ながい、ながい旅でした。

どこに行けば、どんな犬が、猫がいれば、
この子が一番しあわせになれるところなんだろうと。
二匹は考えながら、旅をつづけていました。

力強さと、やさしい言葉で守られたその子は、
じぶんの体がどんなにつかれて苦しくても、
二匹といっしょにいられてとてもしあわせでした。

やがて、旅の果てで・・・

ジャングルの湖のほとり。

けがしたあの子は、ゆっくりとたおれ。

息がゆっくりうすくなり。

まばたきをゆっくりうごかして。

気持ちよさそうにためいきをつきました。

「うれしかった」

声なのか、ためいきなのかわからない、

あの子のちいさなことばが、湖の水の音にとけていきました。

そして、いつのまにか息をしていませんでした。

まっしろな猫とまっくろな犬は、大きな声で空の神様にさげびました。

「どうか天国で幸せになってください。
私たちが大切だったイヌともネコともわからない
あの子が幸せになれるように」

なんども、なんども、なんども。

朝日はやがて昼間のあたたかな日に変わり、そして夕陽になり。
夜になってもさげぶ二匹を見ていた神様が、月からかたりかけました。

「あの子はきみたちと一緒に旅ができて、
とてもしあわせだった。なにもしんばいしないで」

二匹は一緒によろこびました。ほんとうによかったと。

神様はつづけていいました。

「さあ、笑って。少しの間だけお別れしよう」

なみだはとまらなかつたけれど、
二匹はせいいっぱい笑ってお別れを言いました。

「さようなら、また会いましょう」

神様のとなりにいたあの子が嬉しそうに、笑いました。

そうしてあの子は、神様と天国の旅へゆきました。